

外文明と内世界

1. 研究組織

研究代表者：土屋 健治（京都大学東南アジア研究センター・教授）

研究分担者：河上 倫逸（京都大学大学院法学研究科・教授）

白石 昌也（横浜市立大学文理学部・教授）

横山 俊夫（京都大学人文科学研究所・助教授）

園田 英弘（国際日本文化研究センター・教授）

西村 重夫（京都大学東南アジア研究センター・助教授）

弘末 雅士（天理大学国際文化学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

この研究班のねらいは、地域が何らかのまとまりをもって成立力学を、社会科学者と人文科学者が共同で究明しようというところにある。

そこで前提とされているのはおよそあらゆる地域において次の二方向のベクトルが並存しているということである。つまり、一方で、ある地域をそれ自身の固有性によって他と区別し、これを完結した共同世界として形成しようというベクトル、すなわち「内世界」形成へ向かうベクトルがあり、他方で、いくつかの内世界と同質化・共通化・普遍化させようというもう一つのベクトル、すなわち「外文明」がある。ある地域の固有性を把握するということは、内世界と外文明の間のこの連関の様相と相互作用の力学を解明することにほかならない。しかも肝心なことは、これを「外」の挑戦に対する「内」の応戦という視点では毛頭なく、内世界それ自身の主体的営為という視点において捉えることである。「外」はいつも「内」の問題として表れる。「外」は「内」に受容され「内」において定位されていく。このダイナミクスを研究主題とする。

次にわれわれの研究対象は、東南アジアの精神世界である。別言すれば東南アジア世界を物理空間・社会空間・意味空間の3つに分けた際の意味空間が研究対象である。ここに意味空間とはそこに住まう人々によって描き出された世界の姿かたちでありそのイメージである、ということができる。人々は時間についてさらに空間についてどのように了解するのか、その「了解の構造」とはどのようなものなのか、また、人々が共通にあるいは個別的に得ていく日々の経験、それがあがりきった経験であれ、尋常ならざる経験であれ、それに対して、どのようなかたちを与えるのか、そこに認められる「意味の構造」はどのようなものであるのか。これら

が、当面の研究課題、研究対象であり、そのために、言語とシンボル（儀礼、神話、民話、倫理、法、芸術等）を中心とした幅の広い分野が研究対象となる。

この研究は他のさまざまな研究グループとの間の共同研究として進められなければならない。意味空間論という研究分野を物理空間論ないし生態空間論、また社会空間論と連動させることが必要なのである。意味空間が生態空間や社会空間を越えて成立すること、また時として三者が相互に無関係であることはいうまでもない。しかしそのことはこれら三者の間の生き生きとした対話こそがもっとも求められているのである。このような対話と親密な研究交流を通じて、東南アジアを全体的にみる視座は、東南アジア地域以外の研究者を含めることによってはじめて成立可能となるであろう。

このようにして、東南アジアそれ自体の研究を通して、たんに東南アジアだけでなく、広く人類が生み出してきた「文明と文化」についての原理的な問いかけを行い、そのいくさきについての思索を深めることを目的とする。

3. 平成6年度の研究経過

平成6年度において研究班として3回の研究会を開催した。そのうち1回は公募研究B01班との合同研究会であった。

これらの研究会の概要は次のとおりである。

7月2日～3日 第1回研究会〔於大津〕

今年度の基本方針について

「王権の喪失について：ベトナムのラストエンペラー」（報告者：白石昌也）

「アルジュナ・ウィジャヤからスタソーマへ：モデルとしてのインド文学と現実としてのジャワ世界」（報告者：青山 亨）

9月16日～18日 第2回研究会〔於対馬〕

『ハッタ回想録』を読む

フィールド調査：国境の島対馬の歴史と風土に見る「外文明と内世界」

12月22日 第3回研究会〔於伊豆、公募研究B01「東南アジア近代における文化の自画像」班との合同研究会〕

「近世北スマトラの内世界の形成」（報告者：弘末雅士）

「野蠻文化闘争：イバンの逆襲」（報告者：内堀基光）

第1回研究会では、最初に、研究代表者土屋が提案した今年度の基本方針について意見を交

換した。次いで白石は、ベトナムの「ラストエンペラー」であるバオ・ダイ他の回想録を題材として、バオ・ダイが自発的な退位と政権の委譲に同意する過程とベトナムの王朝が革命政権によって解体され吸収されていく過程を、儒教的国家・王朝・革命概念のコンテキストに沿って政治文化的に解釈しようと試みた。ゲスト・スピーカーである青山亨氏は、古ジャワ語文学の代表作であるアルジュナ・ウィジャヤからスタソーマへ展開される思想的変化を解釈しようとした。

第2回研究会では、モハメッド・ハッタ著『ハッタ回想録』（めこん、1993年）を材料として、インドネシアの初代副大統領となったハッタの精神世界における「内」と「外」を参加者全員で論じあった。論議的となったのは、ハッタの観念における「あちら」と「こちら」の関係を中核としたハッタのイスラーム観、オランダ観、太平洋戦争観などであった。その際つねに、スカルノと比較する視座が設定された。第2回研究会では、対馬の各地を歩いた。「国境の島」対馬の風物は、「外文明と内世界」の問題を直感的に捉える一助となったと思われる。

第3回研究会では、弘末が近世（14世紀～17世紀）の北スマトラをテーマとし、民族グループが定着していく過程における南インド出身者の果たした役割について報告した。南インド沿岸地域は元来、西アジアとの接触によりインドの中でも外来文明の影響を受けやすかった地域であるが、その出身者たちはスマトラにおいても現地人と混交し、きわめてメスティーソ的な集団を形成したと考えられる。弘末は、ガヨやバタックなどの民族グループが自らの起源神話を作成し、民族集団を形成するに際し、スマトラ島周辺に広くネットワークを有し、職業、宗教活動を通して巡回し、現地人とも混こうしていた南インド人が果たした役割に着目した。内堀は、ボルネオ（カリマンタン）の民族集団であるイバンを事例として取り上げ、イバンのエスニック・アイデンティティの形成や変遷の諸相が論じられた。

以上のほか、「外文明と内世界」の研究と関連して、個別に国内調査、海外調査が行われた。

土屋は、『インドネシア：思想の系譜』を著し、インドネシアの成立を思想史の視座から解明した。21世紀を目前に控えた現在、東南アジアが直面している政治的・文化的課題は複雑多岐にわたる。その中であって、国民国家という枠組そのものを思想的に究明することは、とりわけ重要な課題である。土屋は、無味乾燥になりやすい思想の考察にあたって、生の人間の息吹から肉薄し、欧米とアジア、伝統と近代、普遍と個別、そして「外文明」と「内世界」の葛藤を捉え、20世紀に生まれたひとつの国家、国民における知の営みを描き出した。

河上は、1994年3月にミュンヘンのニュルンブルク城で開かれた「マックス・ウェーバー・シンポジウム」で「日本の法社会学におけるマックス・ウェーバー」（ドイツ語）と題する報

告を行い、日本法社会学におけるウェーバー理論の変容過程を三期に分けて分析した。また、1994年11月、1995年1月、3月の3回、与野市で開かれた連続シンポジウム「新しい大地の詩」をコーディネートした。「母なる大地：神々のヨーロッパ」というテーマの報告では、信仰共同体の神話構造について、古代ヨーロッパ史との関連から講述を行った。

白石は、前述の研究報告のほか、1994年3月から4月にかけてベトナム文化活動調査に従事し、1994年6月には、ベトナム地域経済圏と周辺諸国の関係についての調査を行った。

横山は、工業化以前の日本および琉球における外来文明の変容と土着化の実態を解明するため、第一に、貝原益軒『自娛集』に含まれる「本邦七美説」「国俗論」の精読、『神祇訓』残存写本類の収集と校訂、『日記』『大和本草』『花譜』にみられる和品植物、とりわけ桜をめぐる言辭の分析を行った。第二に、『図書総目録』『古典籍目録』『国文学資料館文献目録』『牧野文庫目録』をはじめ、いくつかの藩の藩校文庫目録、大英図書館、ケンブリッジ大学図書館、レオン・ド・ロニエ文庫などの在外文庫などの情報を入力した。第三に、久米島の上江州家文書、奄美大島宇検村の吉野家文書、徳之島下久志の松林家文書の調査、ならびに縁者からの聞き取りを行った。

園田は、日本に関する一種の地域研究である日本人論・日本文化論を多量に読破し、「日本的特色」というものがどのような論理構造の上に成立しているかを明らかにしようと試みた。日本文化論は、日本の文化の特色を、日本独自の国民性や社会的性格や日本的制度などで明らかにすることによって、トートロジーに近い性格をもっている。このような困難から脱出する方法を探索中である。

西村は、1994年10月から12月にかけて、カリマンタンのインドネシア・マレーシア国境地域において学校調査を行った。学校教育の活動からナショナリゼーションのベクトル、ローカリゼーションのベクトル、国際化のベクトルの三者を抽出し、それらがもたらす力学を考察しようとした。成果の一端は、1995年2月に京都で開かれた「東南アジア学フォーラム」において「国境の村の国民教育：カリマンタンにおける小学校の比較と関係」と題して報告した。

弘末は、前述の研究報告のほか、北スマトラを対象として、内世界の成立に関する研究を進展させた。

4. 研究の成果とフロンティア

第一に、東南アジア地域研究を専門とする班員からの「外」と「内」の重層的構造を解明する試みが個別具体的に進められた。弘末の場合を例示するならば、近世スマトラの内世界の形

成に南インド出身を自称する人々の果たした役割が明らかになった。従来、インド文明、イスラーム文明の東南アジアでの定着において、文明をもたらす外来者と受容した local genius との結合がしばしば指摘されてきたが、近世スマトラの事例は、外来文化を担い、かつ同時に内世界の形成に関わった存在として、南インド系のメスティーソが無視できない役割を果たしたことを示している。こうした研究を進めるなかで今度は、そうしたメスティーソ的空間に区切を設けさせる、言い換えれば内世界を形成させる要因は何であるか、より広いコンテキストで説明する必要があると弘末は感じている。ベトナムにおける植民地支配の問題を解明しようとする白石、インドネシアにおける国民統合と教育の関係を究明しようとする西村もそれぞれ、「外」と「内」の相互関係について個別具体的に研究を展開させている。

第二に、日本研究およびヨーロッパ研究を専門とする班員から「外文明」と「内世界」の関係をめぐる比較の視座が提示された。河上の場合、西欧植民地支配の歴史的意義を、近代日本の果たした役割を視野に収めつつ検討することが進められている。具体的には、第二次世界大戦の日本の敗北と戦後処理の問題を、植民地解放独立といった視覚から明らかにしようとしている。横山の場合、日本および琉球における外来文明の変容と土着化の相互関係において、両者が重層性をもって交じりあい、しぶとく共存した様子が判明されつつある。園田の場合、逆欠如論を発表したが、それは、日本文化を分析する枠組をもって外国の文化を分析し、その枠組が日本以外の文化にも有効であるかどうかを明確にする方法論である。現在は西洋との比較分析を進めているが、対象を徐々に東南アジアに拡大しようと試みている。

第三に、他の研究班と積極的に交流を行い、民族・国民・国家の創出について新しい視角が与えられた。

5. 今後の課題

今後の課題として以下のことが挙げられる。

(1) 分析枠組の設定

上述したように、個別具体的事例に即した研究は展開しているが、それらを総合するための分析枠組を設定することが課題となる。その際、土屋が著した一連の著作『インドネシア民族主義研究』『カルティニの風景』『インドネシア：思想の系譜』などが分析枠組を設ける上での重要な指針となるであろう。

(2) 個別研究の推進

共同研究としての統合の必要性は認めながらも、基本的には、個々の実証的な研究を重

視する。個々の研究者は、個別具体的な現象のなかに「外文明と内世界」というパラダイムをどのように取り入れていくかをつねに自問しなければならない。

(3) 比較の視点の重視

われわれの研究班は、東南アジア地域の研究者とそれ以外の分野の研究者（日本、西欧）とがほぼ同数からなる。この特徴を活かすために、東南アジアが外からどのように見えるのか、また、東南アジア的なダイナミズムを日本や西欧に適用すると、どの点でどのように不都合が生じるのか、あるいは逆に、日本や西欧の特色がよくみえてくるのかという、空間的な比較を重視したい。しかしそれとともに、方法的にも、歴史学、法政史、文明論、教育学、国際関係論等、多様なので、方法論の間の比較と相互交流についても留意したい。

以上のことを実現するために、共同研究、個別研究を積極的に推進し、必要に応じてさまざまな分野の専門家と内外を問わずに知的交流をはかり、さらに国内はもとより海外での学術調査を遂行する予定である。

6. 研究業績（平成6年度発表分）

土屋健治

『インドネシア：思想の系譜』勁草書房，1994.

「ジャワ：内向的政治文化の世界」矢野暢編『講座現代の地域研究第2巻 世界単位論』弘文堂，pp. 99-130, 1994.

「ナショナリズムと国民国家の時代」土屋健治編『講座現代アジア第1巻 ナショナリズムと国民国家』東京大学出版会，pp. 3-17, 1994.

「芸術と文学」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいインドネシア第2版』弘文堂，pp. 154-183, 1995.

河上倫逸

"Die Möglichkeiten einer Zeitgeschichte anhand von Anton Mengers Biographie und Zustand der Materialienforschung," 『法学論叢』134-3, 4: 1-117, 1994.

"Eugen Ehrlich in der Japanischen Rechtssoziologie," 『法学論叢』134-5, 6: 1994.

「普遍史のなかのヨーロッパ近代と市民」茅野良男編『ドイツ観念論と日本近代』ミネルヴァ書房，pp. 232-257, 1994.

『ヨーロッパが崩壊する』（共著）光文社，pp. 148-209, 1994.

白石昌也

「第1次インドネシア戦争とジュネーブ会議」山極晃編『東アジアと冷戦』三嶺書房，pp. 285-325, 1994.

「王権の喪失：ヴェトナム八月革命と最後の皇帝」土屋健治編『講座現代アジア第1巻 ナショナリズムと国民国家』東京大学出版会，pp. 309-340, 1994.

「ソ連・東欧社会主義圏崩壊後のベトナムにおける世界と地域の認識」『経済と貿易』167: 41-57, 1994.

「ベトナム独立初期の王権について」『歴史と地理：世界史の研究』468:1-13, 1994.

「ベトナムの東南アジア地域認識：1975年～1986年」『東洋文化研究所紀要』126:159-217, 1995.

翻訳, ファム・カク・ホエ『ベトナムのラスト・エンペラー』平凡社, 1995.

横山俊夫

「貝原益軒『家道訓』考」前川和也編『家族・世帯・家門：工業化以前の世界から』ミネルヴァ書房, pp. 392-419, 1993.

「琉球列島における宗教関係資料に関する総合調査・総合目録編」(共著), 科学研究費補助金(総合A)研究成果報告書, pp. 187-234, 1994.

「雅にふく風・吉方にむく風：節用集・大雑書の世界」『武庫川女子大学生生活美学研究所紀要』4: 25-29, 1994.

「達人への道」横山俊夫編『貝原益軒とその時代』平凡社, 1995(出版予定).

園田英弘

『西洋化の構造』思文閣出版, 1993.

『士族の歴史社会学的研究』名古屋大学出版会, 1995.

西村重夫

「インドネシア共和国：教育の姿」馬越徹編『国際理解教育と教育実践1 アジア諸国の社会・教育・生活と文化』エムティ出版, pp. 96-106, 1994.

「インドネシア」権藤与志夫編『21世紀をめざす世界の教育』九州大学出版会, pp. 64-78, 1994.

「教育」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいインドネシア第2版』弘文堂, pp. 203-216, 1995.

弘末雅士

「インドネシアの民族宗教と反植民地主義」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』山川出版社, pp. 261-285, 1994.

"The Batak Millenarian Response to the Colonial Order," Journal of Southeast Asian Studies, 25-2: 331-343, 1994.

「文献目録：戦後のアジア論・アジア研究(東南アジア)」溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『世界像の形成』東京大学出版会, pp. 文献目録26-27, 1994.